

シラ書(集会の書) 35章12-17節

テモテへの手紙二 4章6-8, 16-18節

ルカによる福音書18章9-14節

本日の旧約日課は、シラ書です。聞きなれない文書名ですが、旧約続編にある文書です。カトリック、聖公会では聖書日課に取り入れています。プロテスタント教会では礼拝で読まれることはほとんどありません。『聖書』の文書の分類では知恵文学に入りますが、文書全体の主題は律法を重んじることの大切さと尊さです。律法を守ることこそ最も大切な知恵なのです。

冒頭に近い2章では、「主を畏れる人は、主の言葉に背かず、主を愛する人は、主の道を守る。主を畏れる人は、御旨に適うことを求め、主を愛する人は、律法に満たされる」(シラ2:15-16)とあります。主の愛に応える、主を愛するとは律法を守ることにはほかならないのです。

本日の個所は、貧しい人、苦しみの中にある人々を、主なる神様が憐れんでくださることを告げています。「主は報いてくださる方」(35:13)、「主は裁く方」(35:15)「(主は) 虐げられている者の願いを聞き入れてくださる」(35:16)、「主はみなしごの訴えを無視されず、胸の内を打ち明けるやもめを無視されない」(35:17)などの文言は、イエス様の姿を想起させます。ただし、シラ書において、その憐れみが具体化されることの基礎は、律法に基づいた正義の実行です。

福音書の物語は、イエス様の譬え話です。物語の構造自体は非常に明瞭です。最初に、ルカ福音書の特徴である前提から始まっています。「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された」(18:9)、そこでは何がいけないことなのかを明示しています。また、最後にある結論も明瞭です。「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」のです。

物語の細部を見ますと、「正しい人間だとうぬぼれて」とありますが、うぬぼれの原因は、「自分の正しさ」です。その「正しさ」とは、単純に良い悪いではありません。律法に照らし合わせた「正しい」状態のことです。「正しい人間だとうぬぼれて」とは言い換えれば、「律法的に考えて、自分は悪いことをしていない、むしろ義を行っているのだと自覚していること」からくるうぬぼれです。

たとえ話の中にあるファリサイ派の人は、「奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく」と「してはならない」ことをしっかりと守っていました。それだけではなく、「週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」と、「したほうがよいこと」をも積極的に守っていました。教会では、伝統的にファリサイ派の人々を「偽善者」のように説明することがありました、あるいは、今もあります。実際の歴史的なファリサイ派の人々は、決して偽善者ではありませんでした。律法に基づき宗教的・倫理的に正しいことを実践す

る人々でした。またその点で尊敬されていた人々でした。唯一欠点があるとするならば、そのような「義」である自分たちと、律法を守れない「不義」なる人たちとを明確に区分してしまうことです。そして、その区別が差別的な視点へ変わってしまうことです。そこに大きな問題があります。

なぜ問題なのか、それは律法という存在が、普通の法律であると同時に、普通の法律ではないからです。律法とは、主なる神様がご自分の愛に応えるためにと、人間に与えた法律です。主なる神様の愛に応えるために律法を守る、法律である以上、守ったか守っていないかという判断基準があります。その意味では律法は普通の法律です。しかし、主なる神様の無限の愛に応えるために律法を守るという意味では普通ではないのです。その歩みがどれほど深くても、不十分であることに気づかされるからです。律法とは、それを守れば守るほど、その人が謙虚にされる存在なのです。

そして、その謙虚さとは、主なる神様に対してだけではなく、律法を守らない人々、あるいは守れない人々にも向けられます。主なる神様の愛は、そのような人々にも注がれているからです。そして、そうであるがゆえに、律法を徹底して守るとは、主なる神様が愛されているすべての人を幸せにするまで続くことに気が付かされるのです。

譬えに登場するファイリサイ派の人は、律法を真剣に守ったのですが、自分が律法を守ることを通して、ほかの人々、特に守れない人々をも幸せにするという視点はありませんでした。むしろ、守ることを通して謙虚さを失い、うぬぼれへとつながったのでした。このうぬぼれは、主なる神様の愛に応えるとは、人間的行為として、これぐらいでよいという判断を示したことにほかなりません。それゆえに、それは「義」とはされない歩みなのでした。

譬えに登場する徴税人は、仕事上生きるために異邦人と接触し、「律法」を破らざるを得ない状況にいました。それは「律法」からは決して「義」とされない状態です。他にも少し多く取り立てるなど悪いことをして、「義」ではない状態であったかもしれませんが、その人は、「**神様、罪人の私を憐れんでください**」と言い、律法を守れないがゆえに、主なる神様の前に謙虚でした。それは、本来ならば、どれほど真剣に律法を守ったとしても、人間が常に語るべき言葉です。徴税人の姿が示す事柄は、律法を守らなくてもよいということではありません。しかし、彼は、最も大切な掟を守ったといえるのです。それは、人間は、主なる神様以外に希望を持たないという掟です。

イエス様は、この譬えを通して、主なる神様の前に、人間としてへりくだり、主なる神様にのみより頼むこと、それが義とされることだと教えています。そのような義から、主なる神様が愛しておられるすべての人が、その愛に気付き、世界に平和が広がる歩みが生まれるのです。わたしたち一人ひとり、礼拝を通して謙虚にされ、豊かな実を結ぶことへと導かれていきたいと思います。そしてそのような出来事が起きる教会として、これからも歩んできていきたいと思います。